No.246

●第21回三経連経済懇談会
●函館地域会員懇談会
●経済施策説明
「空港民営化の事例と課題」
●まち探訪　増毛町

道経連会報
Hokkaido Economic Federation

2016 11・12
November December

雪の増毛駅

北海道経済連合会

食クラスターグループ

食クラスターグループでは「食文化の創造と発信」のテーマ―の一環として、空知、東川地区で修学旅行生の農村体験など、グリーンツーリズムを推進されている㈱スポートピア、㈲アグリテックを取材しましたので現状と課題をご報告します。

（取材日10月５日）

「そらちDEい～ね」の取り組み

修学旅行生の農業体験ツアーの仕組みとして「そらちDEい～ね」は㈱スポートピアが事務局となり2005年にスタートしました。開始初年度は日帰り体験の1,064人のみを受け入れましたが、2016年は日帰り226名、泊り4,369名まで拡大し関西の高校生を中心に25校を受け入れるまでに拡大しています。受け入れ対応農家も200軒を超え、民泊の許可を取得。滝川、奈井江、砂川、羅臼、雨竜、新十津川、芦別、赤平、深川、美唄、由仁、東山、月形、神居、新篠津、当別の各エリアと連携しています。

空知の農業は中規模の栽培品目が多いことが特徴です。機械化ではなく手作業が依然として多いため、生徒たちは農家の負担にならないように普段どおりの生活と農作業を体験し、各農家には４人単位で宿泊します。この人数であれば農家側の目も行き届き、交流の密度が濃く六畳間などの一部屋で賄えることができます。シーズンをすべて通すと一軒の農家が20組受け入れることが可能ですが、年間10組前後の受け入れが平均的です。受け入れ期間の生徒の携帯持ち込みは原則禁止。また先生の顔を見ると生徒は現実に戻ってしまうため、先生の巡回は極力止めてもらっています。携帯やスマホがなかった10年前の子供達と異なるのは情報量。泊まる農家を予め通知するとSNSやブログで事前にあらゆる情報を見てしまい現地での感動が薄れるので、直前まで泊まる農家を通知しないのが基本方針です。

㈱スポートピア　安田　光則　社長

グリーンツーリズムの意味と課題

耕作放棄地が広がると国土は荒廃してしまうので、農村を守ることは環境と国土の保全につながります。そのためにも農業体験を通じて、農業の大切さや食料のモノづくりの現場、地産地消の大切さを若いうちから体験してもらう必要があります。また農家民泊の受け入れは農家が楽しんでやらないと継続できません。経営を跡継ぎに譲った夫婦が比較的この取り組みに熱心ですが、規模を拡大し借金を返すのに必死になっている農家には生徒を受け入れる余裕がありません。その意味でも「想いがあり」「夫婦の共同作業として」できる農家が必要です。また最初に受け入れた生徒の印象も大切。言葉足らずとなりがちな男子生徒よりも、好印象となる可能性が高い女子生徒を初回は振り分け、継続になると均等にお願いしております。いずれにしても生

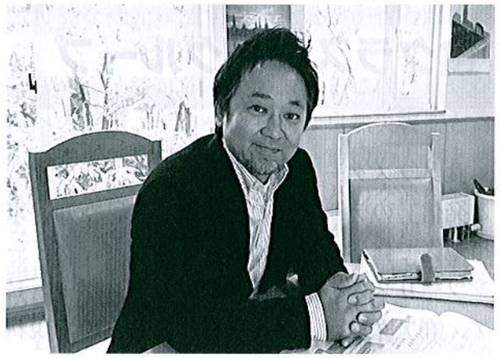
徒たちが、農家の方と触れ合い現場を体験することで「農業には知恵と努力が必要」ということを理解してもらうことが目的です。またインバウンド対応は日本語を勉強している韓国の学生13人を受け入れた実績がありますが、日本語ができないと農家は現実的には対応できません。

「そらちDEい～ね」取材所感

「生徒が最後に泣く場面を中心に番組を作りがちなテレビではこの取り組みの本質は見えてきません。農家は生徒を泣かすためではなく『若い人達を育てる想いがあり』『生徒の交流を楽しんで』受け入れているのです。」との安田社長のコメントが印象的。また「規模が拡大して機械化が進むと、生徒を楽しんで相手するような感じになりません」というお話も、大規模化、効率化だけで日本の農業の方向性を語ることへの危うさを、示唆されており「農業は楽しい」という想いを伝えることこそが、次世代へとサステナブルに持続する農業と国土の維持につながる原点であることを実感致しました。

東川町㈲アグリテックの取り組み

㈲アグリテックは農業体験、移住サポート、通販、体験型観光などを中心に農村振興を総合的に牽引。東川を中心に北は士別、名寄から南は富良野まで広範囲をカバーし年間1,500人～2,000人の修学旅行生を受け入れ。宿泊対応可能な農家は現在90軒。「そらちDEい～ね」と同じく４人単位での修学旅行主体の農家民泊をアレンジしています。都市と農村の分化が進み高校生にとって農業の現場は異次元。「トマトは土の中にできる」と思って

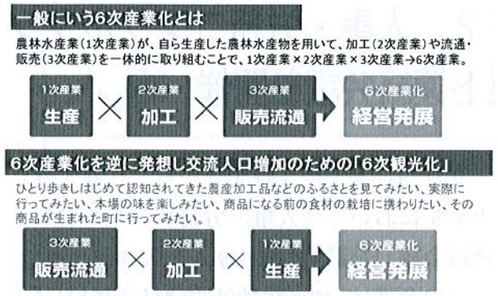


㈲アグリテック　中田浩康　社長

いる高校生もいるため、農業を「他人事」ではなく「自分事」として「生命を頂いている」という意識を喚起することが目的です。

「コミュニケーションツーリズム」と「６次観光化」

欧米とは環境も人も異なるので日本的グリーンツーリズムの仕組み構築が必要。そこでキーワードとなるのが**「コミュニケーションツーリズム」**という観点。日本では古来「旅」は「他火（たび）」と表記していました。これは「異なる地で同じ志を持った心の火にあたる」という意味で、異なる囲炉裏の火を囲む相互扶助の気持ちが人の心を癒すとのことです。高校生達は農家民泊から旅立つ時に泣くのは「ほっとした」とか「去るのがつらい」だけでなく、農村の生活にある「大人との関係性や人の優しさ」に触れたからです。「初めて大勢でテーブルを囲んで御飯をたべた」「知らない村の人も親切に声をかけてくれた」など、現代の都会の子供達は想像以上に管理社会のなかで切実に疲れています。だからこそ農村の「他火」によって涙が出てくる。その意味で「人が人にあう旅（他火）」を「グリーンツーリズム」ではなく「コミュニケーションツーリズム」として活動を位置づけています。「修学旅行生達がスーパーで農産



物を見て世話になった農家の顔を思い浮かべる」そういった人と人との心のコミュニケーションを結ぶことがこの事業の意義であり役割です。尚、アグリテックでは東川への移住・定住のコーデイネートも行っていますが、家やインフラを用意しても地域に仕事がないと移住はできません。大事なのは「求人している企業と、移住したい人をつなぐこと」。このため地元企業の社長と移住希望者をマッチングさせる事業も行っています。このように「人と人を結びつけること」がアグリテックの企業理念です。また農業の６次化も一方通行ではなく相互方向に結びつける考え方が必要です。６次化をするとその製品を手にした消費者が「商品の原材料を作っている土地はどんなところなのだろう？」と思うはずです。その想像力を力点として１次＝農村のところに人を引き寄せることが「６次観光化」の中心的なコンセプトです。これは従来の１次⇒２次⇒３次の流れとは逆方向ですが、従来の６次化の流れとこの６次観光化の流れが相互に還流し、その輪が大きな渦となり拡大するイメージを持っています。

東川スタイルについて

インバウンドは韓国、ロシア、台湾の生徒の受け入れの実績があります。日本語が片言でもできれば農家は対応可能です。ちなみに東川町役場ではウズベキスタンやロシア、ラトビアなど８ヶ国の外国からの職員を受け入れており超インターナショナル。アグリテックでもラトビアの名誉領事の社員がいるため、ラトビア領事館の看板を掲げ兼務されています。その意味では東川は北海道では極めてユニーク。1985年に東川を「写真の似合う町」＝「東川スタイル」の町にしようと当時の町長が提唱しました。それ以来、美しい景観と同時に「東川に住む人は写真に写っても美しいように、身なりも心もキチンとしよう」という意識が地元に根付いています。地域が持続する活力はそういったコンセプトの力にあります。現在ではニセコの「パウダースノー」に対抗して、大雪山の「シルキースノー」が話題を呼び、冬場は欧米人の観光客が激増しています。

東川㈲アグリテック取材所感

東川は人口が年々増加しています。旭川空港に近いという利点はあるものの、鉄道も高速道路も通っていません。ここにある風景、人の美しさと「東川スタイル」と言われている「生活の美しさ」がその根幹にあります。東川には洒落たイタリアの地方都市のような小さくても美しくて人が訪れる町を形成できる可能性があります。留学生のなかには帰国せずに東川で起業する方もいらっしゃるほどです。

この「東川スタイル」のポテンシャルと方向性、そしてアグリテックが提唱する「コミュニケーションツーリズム」や「６次観光化」のコンセプトは、我々が取り組むべき多くの「気づき」を含んでおり、地方創生の一つの大切な突破口を示しています。

（食クラスターグループ　近藤　孔明）